2005年（H17）
12月16日（金）
日経新聞

文化

望郷の月…南方を生きて

◇マリンプン抑留日本人、帰国までの足跡を追う◇

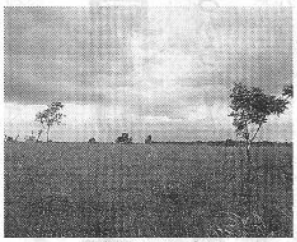
渡辺奉勝

昭和二十年（一九四五年）十月、戦争終結に伴い、東部インドネシア、ニューギニア方面より、陸海軍将兵、民政部関係者、一般民間人約二万人が、スラウェシ島（セレベス島）マカッサルから北へ二百キロのマリンプンに収容され、集団抑留生活を送った。

ほとんど犠牲者なく

今年四月まで在マカッサル総領事であった私は、戦没者慰霊碑、日本人墓地の維持管理のため、スラウェシ島や現インドネシア領ニューギニアなど各地を訪問した。その中で、終戦後、マリンプンに収容された日本人抑留者がほとんど犠牲者を出さずに生き抜き、引き揚げた事実があるのを知った。集団抑留の現地に足を運び、日本にいるマリンプン抑留体験者十数名ほどからも聞き取りを進めていくうちに、さらに多くのことがわかってきた。

マリンプンは、貧弱な草しか生えない不毛の大地。第一次大戦後に抑留されたドイツ人捕虜の多くが飢えやマラリアで死んだ。また、オランダ統治時代、ジャワ農民の集団移住が試みられたが、ほぼ全滅。土まんじゅうの墓が累々と続く「死の草原」と呼ばれたいわくつきの場所であった。



現在のマリンプン

そんな集団抑留地で、なぜ日本人だけが生き抜くことができたのか。

「私たち日本人は、なんとしても生きて内地に帰ろうと覚悟し、直ちに農耕班を結成した。半月ほどで井戸を掘り、ニッパやしの小屋を建て、灼熱の日照りの下、野草で飢えをしのぎながら農耕の集団自活をまがりなりにも始めた。半年後にナス、ウリ等の農作物収穫に何とか目鼻をつけた」

現地に設立した国策会社の元役員である八十代半ばの元抑留者から、そんな回顧談を聞いた。彼は当時を振り返りながら「ただ、マリンプンのジャングルに照らされた月の光が一層の郷愁をかきたてた」と付け加えた。

また民政部の元抑留者は「現地では、引き揚げが終わってからも、現地に残って戦犯容疑者らの弁護に当たって、人望のあった大崎行三海軍大佐を中心に統制を維持していた」と語っている。

生きる糧、皆で確保

連合軍との間で困難な終戦処理事務に取り組んだ人の中には、澄田智海軍少佐（元大蔵事務次官、日銀総裁）や有田圭輔陸軍少尉（元外務事務次官）らもいた。このような優秀な官僚と人材豊富な技術者たちが、合理的な自治組織つくりに貢献したものと思う。

抑留者たちは過酷な生活の中にあっても、短歌や俳句の趣味や演芸を楽しむ余裕をもっていたこともわかった。陸海軍が建てた劇場では、芝居、歌唱、浪曲などが上演された。ある抑留者は「舞台の風景に望郷の思いと肉親の面影を重ね、涙を流し、つかの間の人間性を取り戻した」という。

邦人新聞記者たちは、ガリ版刷りの新聞「草原」を発行した。短波放送で、内外のニュースを集め、短歌や俳句を掲載していたこともわかった。戦時中に軍の委託で発行された日本語紙「セレベス新聞」に出向していた元記者は「情報に飢え、デマやうわさが横行する中、この新聞が抑留者にとって精神を安定させる役割を果たした」と語っている。

しかし、彼らが生き抜くことができた最大の理由は、集団で結束して生活手段を確保するという、いわば農耕民族のDNAに染み付いた能力が遺憾なく発揮された結果ではないだろうか。日本のミクロネシア統治時代に「海の満鉄」と呼ばれた南洋興発の元社員は「無から有を生み出すという戦後復興の序曲は、既にこのような抑留地で実験的に始まっていた」と話す。

現地の人々も感謝

マリンプンが属するピンラン県のナウィル知事によると、日本人抑留者の努力でよみがえった農場は、昭和二十一年五月の引き揚げに際し、オランダ軍将校からの要請で、そのまま残して現地の人々に託されたという。抑留者が利用していた湯治用温泉は、今も村民が利用している。知事は私を案内してくれた。

戦後六十年の今年、同地出身のサレー・パル・ハサヌディン大学工学部長を中心とする日本留学生OBが、マリンプンに慰霊・平和記念碑を建てようと活動を始めた。「インドネシアからの苦学生を温かく迎えてくれた日本人への恩返しだ」とパル氏は話す。悲惨な戦争が取り持つ縁が、未来の国際親善となって実を結びつつあることは喜ばしい。（わたなべ・もとかつ＝アジアアフリカ法律諮問機関事務次長）